

平成21年5月7日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2009

課題番号：18520266

研究課題名（和文） 明清寓言の多様性に関する総合的研究

研究課題名（英文） A Synthetic Study on Various Fables in the Ming and Qing Dynasties

研究代表者

佐藤 一好（SATO KAZUYOSHI）

大阪教育大学・教育学部・教授

30196224

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学 各国文学・文学論

キーワード：明清寓言・動物寓言・義獣譚集・『無如』・『可如』・『闡義』・『聖師録』・『排悶録』

1. 研究計画の概要

本研究は、陳蒲清『中国古代寓言史（増訂本）』、凝溪『中国寓言文学史』、呉秋林『中国寓言史』等の先行研究とは異なる視点から、明清寓言の多様性に総合的考察を加えることを目的としている。

具体的には、明末清初の義獣譚集（動物の義行に焦点を当てた動物寓言集）の系譜を解明すること、明清時代に編纂された寓言選集や埋没している特色ある寓言作品を発掘し、基礎的な考察を加えた後、明清寓言史上への位置づけを図ることである。

加えて、例えば徳田武『江戸漢学の世界』等が示唆する明清寓言の日本への展開にも注目している。

2. 研究の進捗状況

2006年度は、『中国古代寓言史（増訂本）』がイソップ受容史との関係を説く董徳鏞『可如』に焦点を当てた研究を行った。その結果、『可如』の成立を考える際には、イソップとの関係よりも、呂坤『無如』との関係を重視すべきであるという結論に達した。現存『可如』には、『無如』を出処と記す話が多々あり、評語にも明確な『無如』受容の痕跡が認められるからである。また、明代の寓言選集『古今寓言』所収話に関する基礎的調査や、劉元卿『劉聘君全集』巻12「寓言」の独自性に関する考察も行った。

2007年度は、『無如』から『可如』への系譜解明を中心とする調査・研究を行った。その結果、『可如』の著者董徳鏞は、全祖望『甬上族望表』巻下が「西城の董氏」と特筆する浙江寧波府鄞県の名家の出であり、董琳・董鏞を遠祖、董光宏を祖父と仰ぐ人物であるこ

と、父は董応震、母は周氏、抗清の義士として知られる董徳欽はその弟であることがほぼ明らかになった。また、現存する『可如』（前半3巻）には見えない後半3巻の逸文を発見したほか、明の沈弘正『虫天志』や顧聖之『螳談』にも寓言文学史的な観点から考察を加えた。

2008年度は、董徳鏞の生涯に関する考察を継続するとともに、清の孫洙『排悶録』に呉肅公『闡義』の影響が顕著なことに注目して、石川雅望『通俗排悶録』所収の義獣譚に個別の考察を加えた。その結果、董徳鏞の生卒年が明らかになったほか、徐芳「七義賛」（『懸榻編』巻6）や馮景「書十義事」（『広虞初新志』巻19）等の小品を含む義獣譚集の重要性が一層明確になるなど、種々の成果を得た。また、そうした義獣譚集が思想史の重要概念「観物」とも関わる点に注目して、従来は動物学の著作として扱われる李蘇『見物』を思想史・文学史的な観点から再検討した。

以上、3年間で従来明清寓言文学史では必ずしも重視されていなかった事象を、多少は解明できたかと思う。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

（理由）

従来、断片的な指摘・考察に止まっていた義獣譚集の系譜を、著者の経歴を含めて、ある程度まで解明することができたと思う。その中には、寓言文学史研究だけでなく、文言小説史研究にも参考となる事柄が含まれている。

加えて、明清義獣譚の日本への展開という視座を提示することができたので、当初計画

が全面的に順調というわけではないが、総合的に判断すれば、②に当たると思う。

4. 今後の研究の推進方策

『可如』については、従来知られていない董徳鏞の生卒年を解明することができたので、董徳鑑「従兄孔昭別伝」や関連資料を分析の上、2009年度内の公表を目指す。『無如』については、新刊の『呂坤全集（下）』（中華書局、2008年）所収『無如』本文に訂正を要する問題点を発見、現在、その校訂作業を行っている。

吳肅公『闡義』、王言『聖師録』（『虞初新志』巻18）の成立をめぐることは、すでに先行研究とは異なる種々の知見が得られたように思う。旧稿「王言『聖師録』に関する試論」（『中国学の十字路』所収）を補足する意味でも、義猷譚集の系譜上への位置づけが急務である。

石川雅望『通俗排悶録』の義猷譚については、続稿（下）以外に、孫洙『排悶録』全体を視野に入れた考察が不可欠である。そのためには、雅望が訳出していない巻12（翰墨）所収の数多くの尺牘にも分析を加えなければならず、孫洙の別著とされる『広新聞』にも注目する必要があるだろう。

その他、『可如』とも関わる陳其力『芸心識余』や現時点では未見の義猷譚集をも視野に入れて、本研究を最終的には「明末清初を中心とする義猷譚集の系譜」と総括できるように、関連資料の収集・分析に努力したい。

5. 代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3件）

- ①佐藤一好「『通俗排悶録』所収の義猷譚（上）」（『学大国文』第52号、2009年、35～60頁、査読無）
- ②佐藤一好「『可如』小論（補説）—董徳鏞の生涯を中心に—」（『学大国文』第51号、2008年、77～94頁、査読無）
- ③佐藤一好「董徳鏞『可如』小論—呂坤『無如』との関係に注目して—」（『大阪教育大学紀要（第I部門 人文科学）』第56巻第1号、2007年、63～77頁、査読無）

〔学会発表〕（計 2件）

- ①佐藤一好「李蘇『見物』研究の視座」（第13回大阪教育大学日本・アジア言語文化学会、2008年11月23日、大阪教育大学）
- ②佐藤一好「明末清初の動物寓言集の系譜について—『無如』から『可如』へ—」（文芸学研究会第30回研究発表会、2007年3月17日、同志社大学）

〔その他〕（一般講演）

- ①佐藤一好「中国の動物譚—「雁」説話の諸相を中心に—」（平成20年度教育研究講演会、2008年8月21日、堺市教育文化センター）